

宮沢賢治と〈一心〉

京都芸術大学教授

君野 隆久

はじめに

最初は、2020年に講演する予定でした。昨年一昨年とコロナ禍で2年間延期になってしまいました。その分、今日の講演に向けて余裕があったのですが、内容はあまり変わっていません。

今日お話しする「宮沢賢治と〈一心〉」という内容は、このタイトルでお話しすることはもちろん今日がはじめてなのですが、2008年に出しました拙著『ことばで織られた都市』の中に「コロイド空間の行方」という文章を書いておりまして、これは今日の講演内容とだいぶ重複することをお断りしておきます。その時から、私の宮沢賢治に対する認識は、大きくは変わっておりません。

1. 大学院の最初の授業は難解な「伝述一心戒文」

今日はたいへん恐縮ですが、せっかくご紹介がありましたので、私自身の経験から話を始めようと思います。私は最初早稲田大学第一文学部の東洋哲学専修というところで勉強しました。卒業論文は道元について書きました（ちなみに私は僧侶ではありませんし、家もお寺さん関係ではまったくありません）。卒業後はそのまま大学院の修士課程に進んで、道元について修士論文を書こうとしました。大学院で私の指導教授だったのは、三崎良周（1921–2010）という先生で、天台密教の専門家で天台宗の僧侶の方でした。いまお話をしているこの比叡山延暦寺と、おおいに関わりのある先生だったので。もともと早稲田の東洋哲学研究室は、研究室を開いた先生のお一人が福井康順という天台宗の大僧正だった方で、天台宗と縁のある方が多かったです。

三崎良周先生は穏やかさと厳しさを兼ね備えた立派な先生でした。その三崎先生のゼミに入って、大学院の授業で取り上げられたのが、「伝述一心戒文」という文献でした。これを1年間かけて読むというのです。修士・博士の学生が週に一度研究室に集まって取り組むのですが、とてもすらすら読めるものではありませんでした。出典を調べながら精読していくわけですが、一回によくても2頁くらい、数行進むのみの回もしばしばあったと記憶しています。そういう授業を私は大学院の最初に受けたのです。

それがとてもおもしろかった、と言うことができれば、よい話の流れになるのですが、正直申しまして、私はこの文献がまったくわかりませんでした。何をやっているのかまったくわからない状態で、授業に出ても、先生と先輩たちのやりとりをあっけにとられながら見ているだけ、ただノートしているだけという状態が続きました。輪読する順番が回ってきて、私はたどたどしく漢文を訓読したりもしましたが、何かがわかったという感触はついに得られませんでした。

2. 父正次郎あて賢治書簡で「一心」に再び出会う

私は道元で修士論文を書いて、東洋哲学研究室を離れました。そして違う大学の大学院に入り、今度は比較文学・比較文化を専攻しました。博士課程に入ってから、宮沢賢治についてとにかく読まなければという機会



がやってきました、全集（新修版全集）を端から端まで読んだことがありました。それまでももちろん文庫本などで代表作は知っていましたが、恥ずかしながらその程度しか知らなかったのです。ですから私はきちんと宮沢賢治を読んだのはもう30歳になってからだったので、これはかなり遅い方だと思います。

当時いちばん夢中になって読んだのは書簡でした。賢治の手紙には、作品にはあらわれない生々しい賢治の心の動きが読み取れて、堀尾青史

さん（1914—1991、第1回宮沢賢治賞受賞）が作られた年譜と突き合わせながら熱心に読んだことを覚えています。そんなとき、次のような書簡の一節に出会ったのです。

（資料プリント■大正7（1918）年の賢治書簡より①）



講演司会 佐藤 洋子

■大正7（1918）年の賢治書簡より——「一心」「心」「夢」

①2月23日 宮沢政次郎あて

戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象に御座候 その戦争に行きて人を殺すと云ふ事も殺す者も殺さるゝ者も皆等しく法性に御座候 起是法性起滅是法生滅といふ様の事たとへ（先日も屠殺場に参りて見申し候）、牛が頭を割られ咽喉を切られて苦しみ候へどもこの牛は元来少しも恼みなく喜びなく又輝き又消え全く不可思議なる様の事感じ申し候 それが別段何の役にたつかは存じ申さず候へども只然くのみ思はれ候

〔新修宮沢賢治全集 16巻 p.46。以下すべて賢治の引用は新修宮沢賢治全集による〕

私はこの書簡で「一心」の語を見た時、忘れ去っていた、まったく理解できなかった仏教文献「伝述一心戒文」に苦しんだ記憶がよみがえってきたのです。再び出会った、という気持ちでした。書簡が書かれた大正7年というのは、賢治が22歳になる歳で、転機になる歳でした。2月に卒業論文を書き上げ、3月には盛岡高等農林学校を卒業し、引き続き研究生として在学して地質調査をするのですが、将来の方針をめぐって父・政次郎とたびたび手紙を取り交わしています。同時に親友であった保阪嘉内が除籍になり、6月には最初の結核の徵候が診断されるというあわただしい年で、賢治には精神的な動搖が多々あったと年と思います。賢治は、すべての現象がおのれの「一心」に原因することだ、という唯心論的な世界観で自分の揺れてやまない精神を鎮めようとしたのかも知れません。この大正7年の書簡には、時々似たような言説が見られます。

（資料プリント■大正7年（1918）年の賢治書簡より②～⑤）

②3月14日前後 保阪嘉内あて

私共は若い為に悪くすると人を相手にして人の噂でばかり動き出す事があります。暫らく人をはなれませう。静に自らの心をみつめませう。この中には下阿鼻より下有頂に至る一切の諸象を含み現在の世界とても又之に外ありません。〔16巻 p.51〕

③同上

退学も戦死もなんだ みんな自分の中の現象ではないか 保坂嘉内もシベリアもみんな自分ではないか あゝ至心に帰命し奉る妙法蓮華経。世間皆是虚偽仮只真。[16巻p.53]

④4月18日 佐々木又治あて

コノ辺ノ山ヤ川ノ工合ナンカハモウアナタニハ夢ノ様ニ思ハレルデセウ。本当ニコノ山ヤ川ハ夢カラウマレ、寧ロ夢トイフモノガ山ヤ川ナノデセウ。[16巻p.57]

⑤6月26日 保坂嘉内あて

此の度は御母さんをなくされまして何とも何とも御気の毒に存じます／御母さんはこの大なる心の空間の何の方向に御去りになったか私は存じません。（中略）心は勿論円周でもなければ直線でもないでせう。[16巻p.82]

「こころ」と言ったり「夢」と言ったりしていますが、内容としてはほぼ同じような、「すべての現象は心から生じるものだ」ということです。この思想を、かなり真剣にこの頃の賢治は考えていたように思います。

3. 賢治文学創作の基盤となる「一心」の思想

そしてこの考え方は一過性のものではなく、その後発展して、賢治の文学創作の基盤となるようなものになりました。しばしば賢治について「心象」ということ（「心象スケッチ」の心象）ということが言われますが、その起源のひとつとして、「一心」という言葉があると思います。プリントに引用した「春と修羅」序の一部はよく知られたものですが、このようなすべては「畢竟こゝろのひとつの風物です」という考え方には、この大正7年の書簡にあらわれる見方と一貫していますし、晩年の「雨ニモマケズ手帳」の中にも似たような言葉が記されています（プリント資料）。

■『春と修羅』序（大正13年）

これらについて人や銀河や修羅や海胆は
宇宙塵をたべ または空気や塩水を呼吸しながら
それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが
それらも畢竟こゝろのひとつの風物です [2巻p.6]

■「雨ニモマケズ手帳」より

「窮すれば通ず／窮すれば通ず／さりながら／たのむは／こゝろのまことなりけり／こゝろひとつぞ頼みなりけり／こゝろのみにぞさちもこそあれ」[15巻p.58]

4. 日本国語大辞典における「一心」の解説

さて、この「一心」という言葉は、ひろい意味を持った言葉です。辞書の定義をプリントに載せておきましたが、この辞書の定義では、④の意味に近いでしょう。賢治はもちろん他の意味でも「一心」を使っています。特に「心を集中して」という意味での「一心に」はあちこちで使われています。今回はとりあえず名詞としての「一心」を問題にしたので、「一心に」の賢治の用例は挙げませんでしたが、賢治は常に「一心に」も漢字で書いているので、関係がないとは言い切れません。

■精選版 日本国語大辞典「一心」の解説〔コトバンク〕<https://kotobank.jp/word/>より]

いつ・しん【一心】〔名〕

① 心一つ。一つの心。自分の心。また、こころ。

※法華義疏（7C前）方便品「衆生一心上、即有二二相一」

※平家（13C前）二「一心清浄の誠を致し」〔莊子・天道〕

② 心をただ一つのこと集中すること。他事を思わない心。専念。→一心に。

※日本往生極楽記（983-987頃）尋静「三箇日夜、永絶二食飲一。一心念佛」

※化銀杏（1896）〈泉鏡花〉九「帰りたい帰りたい一心でね」〔書経・盤庚下〕

③ 人々の心を一つに合わせること。

※米国及び英國に対する宣戦の詔書 - 昭和16年（1941）12月8日「億兆一心、國家の総力を挙げて」

〔荀子・議兵〕

④ 仏語。（認識論的な意味で）世界を表わし出すものとしての心。唯心。

※性靈集・三（835頃）中寿感興詩「欲談一心趣、三曜朗天中」

※梵舞本沙石集（1283）三「争いかでか平等の一心をさとり、無相の妙体に合かなはむ」

⑤ 仏語。六波羅蜜（ろくはらみつ）の中の禅定（ぜんじょう）のこと。

※往生要集（984-985）大文一〇「忍辱、精進、一心、智慧、転相教化」

⑥ 仏語。信心のこと。仏より与えられた信。

※一念多念文意（1257）「一心は金剛の信心なり」

〔語訳〕(1)梵語 eka-citta の訳としての「ある一つのことだけを考える」の意から、「ある対象に心を集中して、心を動かさないこと」という②の意味が生じる。ここから、「一心不乱」「一心念佛」、また、漢語副詞としての「一心に」などのさまざまな語が生まれた。

(2)②は、「一個人が心を一つのこと集中する」場合であるが、③の漢籍例「荀子・議兵」などには、主に戦争の場面で、「多くの人が心を一つに合わせる」という意味でも用いられ、日本においても戦中の文書によく現われる。

5. 仏典における「一心」

この「一心」という言葉は、仏典にはたくさん出ています。プリントには4つの例だけ抜き出しました。

（資料プリント■仏典における「一心」）。

■仏典における「一心」

①三界の所有は、唯是れ一心なり〔三界唯一心、心外無別法〕〔八十華厳經〕三七〕

②それ一心に十法界を具す。一法界にまた十法界を具して、百法界なり。一界に三十種の世間を具し、百法界はすなわち三千種の世間を具し、この三千は一念の心に在り〔摩訶止観〕卷五上〕

③万法は是れ一心の資にして、一心は是れ万法の本なり〔伝述一心戒文〕中巻〕

④一心とは本より平等法界、三千の依正の当体なり。仮りに諸名を立つる故に、九識等の名、これあり。また、九識相即の三身なり。三身とは、我等衆生一念の心なり。故に諸識は外になし、ただ一心なり。

一心は外になし、ただ諸識なり。また三身は外になし、ただ一心なり。……[中略]……ただ一々の諸法は一心、一心は諸法なる故に、諸法を見、一心を見、一心を見、諸法を見るなり。観心の所要、ただこれにあり。（「三十四箇事書」『天台本覚論』日本思想大系9）

一番よく知られているのは、華厳經に出る①の「三界の所有は、唯是れ一心なり〔三界唯一心、心外無別法〕」ではないでしょうか。欲界・色界・無色界という、この世のすべては突き詰めればこの「一心」であって、それ以外に存在というものはない、という意味です。これは非常に有名な文句で、さまざまな仏典に引用されます。②は天台宗の基本的な聖典のひとつである、中国の天台智顥の著作で



ある『摩訶止觀』の一節です。人の一瞬の心の中に、存在するすべての現象が備わっているとする天台宗の基本的な教義である「一念三千」について書かれています。③の「万法は是れ一心の資にして、一心は是れ万法の本なり」というのは、私が若い頃に苦しんだ「伝述一心戒文」の一節です。「一心=万法」であることを意味しているのでしょうか。④は、「天台本覚思想」といって、主に中世にこの比叡山で育まれた仏教思想の文献からの一節です。わかりにくい文章ですが、「一心」を連呼して、要するに「一心」=「諸法」である、ということを力説しています。このように仏典に載せられている「一心」を探していくと、枚挙に暇（いとま）がありません。

6. 仏教の「一心思想」を賢治はどのように体得したか

おそらく宮沢賢治はこのような仏教の「一心」の思想を、何かで読んだか、あるいは人から聞いたことは間違ひありません。では賢治はどちら、誰からそれを学んだのか、ということになりますが、そのことは今日のテーマではありません。私が考えるのは、すべての存在が自分の「一心」から生まれるという思想は、本で読んだり、人から聞いただけでは、単なる言葉であり、知識にすぎません。単なる言葉であり知識に過ぎないものを、どのようにして自分の実感として消化してゆくか、ということの方が大事だと思います。本当の出家（僧侶）であれば、このような仏教上の知識を、行（修行）を通して理解し、体得してゆくものでしょう。しばしばテレビなどでも放映されるこの比叡山の様々な「行」（回峯行や、籠山行、四種三昧）は、そのためにあるのでしょう。しかし、賢治は出家ではなく、そのような宗派の中で認められた形のある修行は行っていません。しかし賢治は、この「一心」の思想を、単なる知識として振り回しているのではなく、実感として体得している様子がうかがえます。それはいつ、どのようにして身に着けたのでしょうか。

私がここで注目するのは、賢治が盛岡高等農林学校時代にしきりに制作していた短歌です。賢治の短歌はある意味で後の詩や童話を予見したものですが、私は次のような短歌に着目します（資料プリント）。

コバルトのなやみよどめる
その底に
加里の火
ひとつ
白み燃えたる（1巻 p.105）

これはカリウムの炎色反応をコバルトガラスを通してみている様子をもとにした歌のことです（板谷栄城）。また次のような歌もあります。

鉄の歯おり
紅くよどみて
水もひかり
五時らかければやめて帰らん
(1巻 p.154)

これも化学実験の歌です。板谷栄城さんの説では、これは鉄の化合物の溶液にアルカリを加えて水酸化鉄のゲル状のコロイドを析出させる実験であるといいます。

これらの歌は、特殊な印象を与えます。目の前の化学実験を描写していると同時に、自分の心の状態を歌っている、とでもいうような印象を与えます。「よどんでいる」のは、目の前の化学物質なのか、そのときの自分の心なのか、区別がつきません。またこういう歌もあります。

フラスコに湯気たちこもり露むすび
やまかひの朝の
おもほゆるかな
(1巻 p.171)

これはよどんだ気分ではありませんが、フラスコについての「露」に「朝」の気分になる、という歌です。

こういう歌から、おそらく高等農林学校時代、化学の実験で、自分の目の前で物質がさまざまに変化してゆく、その様子に自分の心の状態を重ねるということを賢治は相当していたのではないかと想像されてくるのです。もちろん化学実験をする人がすべてそういうことを体験するわけではありません。しかし賢治はそのもって生まれた資質から、あるいは同時に吸収していた仏教の知識から、外側の世界と、自分の心の状態とを結び合わせる一種の「行」を、図らずも行っていたのではないかでしょうか。賢治は目の前のビーカーやフラスコの中で起こる物質の変化を自分の心の変化と重ねます。それは仏教でいえば一種の「観法」に近いものです。その観法を、自然に対して行ったとき、山や川や樹々や岩石もすべて自分の心の反映であるとする「一心」の思想を、賢治は岩手の自然の中で、実感として体得したのではないかと思われます。

青そらに野ばらの幹もひかれを
あまりに沈む *Liparite* かな
*Liparite 石英粗面岩
(1巻 p.129)

ある山は
なみだのなかにあるごとく
木々をあかつきのうつろに浸せり
(1巻 p.137)

こういう世界の見方の上に、賢治の詩や童話の多くが成立しています。たとえば目の前のフラスコの中の世界を銀河の大きさまで拡大したものが『銀河鉄道の夜』の世界です。そこには「コロイド」という化学の概

念が大切な役割を果たしているのですが（「心象コロイド空間」）、今日は時間がありませんので、その話は省略いたします。

7. 賢治作品がいつまでも人々に読み継がれる理由（わけ）



私が申し上げたいのは、宮沢賢治が、こうした「一心」の思想を持っていたから偉大な作家であった、ということではありません。賢治がこうした「一切の現象はすべて心から生まれたものである」という仏教思想を、詩や童話でもって生き生きと描いてみせた作家というだけなら、それだけでもユニークな存在ではありますが、これほどまで読者を獲得はしないでしょう。

資料プリントの最後に、『銀河鉄道』の夜の終わり近く、列車の中でカムパネルラが姿を消してしまう場面を引用しました。ジョバンニはカムパネルラが消えたことに激しいショックを受け、「咽喉いっぱい」に泣きだすという悲痛なシーンです。

「カムパネルラ、僕たち一緒に行かうねえ。」ジョバンニが斯う云ひながらふりかへつて見ましたらそのまままでカムパネルラの座つてゐた席にもうカムパネルラの形は見えずたゞ黒いびろうどばかりひかつてゐました。ジョバンニはまるで鉄砲丸のやうに立ちあがりました。そして誰にも聞えないやうに窓の外へからだを乗り出して力いっぱいはげしく胸をうつて叫びそれからもう咽喉いっぱい泣きました。もうそこらが一ぺんにまつぐらになったやうに思ひました。（12巻p.156）

カムパネルラには、亡くなった妹のトシが投影されているとか、あるいは結局決別してしまった親友の保阪嘉内が、カンパネルラというキャラクターを作るうえで重要な役割を果たしているとか意見があります。作品の中の人物をすべて作者の人生の中の人物にあてはめて理解するのは限界がありますが、賢治の人生をたどるうえで、妹トシの死や、保阪嘉内との別れが大きな影を落としていることはうたがいありませんし、カンパネルラとの別れの場面の悲痛さは、人と別れる悲痛さを知っていたからこそ書けたものでしょう。

もし「一心」の思想すべてが解決できるのであれば、いいかえれば「すべてが私の心の中のできごと」であるとするならば、妹トシが喪われても、親友の保阪と決別しても、それは賢治をそれほど苦しめなかつたでしょう。ひたすら心を落ち着かせることに努め、そのできごとを消化しようとしたでしょう。

しかし、賢治にはそれができませんでした。トシや保阪のような賢治の愛する人を、賢治はどうしても自分の「一心」の中に入れることができなかつたのです。賢治は愛する人と別れた傷をずっと引きずり、それとおのれの「一心」のあいだでの葛藤を一生続けたのだと思います。

そういう葛藤のあとを『銀河鉄道の夜』には読むことができます。また賢治は羅須地人協会や晩年の東北碎石工場での活動から、東北地方の農民の実態をよく理解し、それに対して悩むところが多かったことも知られています。

賢治は、こうした「他者」が、「一心」の中に包摶できない存在であることを肌で感じていましたし、それと自分の「一心」の間で葛藤しつづけました。そこにこそ「賢治の文学者としての偉大さがある」と私は思うのであり、「その作品がいつまでも人々に読み継がれる理由」なのではないかと考えるのであります。

ご静聴まことにありがとうございました。

お詫び

数名の方から質問がありましたが、録音の調子が悪く聞き取ることが出来ませんでした。大変申し訳ありません、質疑応答部分は削除いたしました。

本講演録は2022年9月21日の賢治忌記念講演会にてお話をされた講師の講演原稿を基に作成したものです。



2022年9月21日宮沢賢治忌法要（歌碑に賢治さんの写真）

発行代表者 関西岩手県人会 金野 衛 岩手県大阪事務所内 (Tel & Fax 06-6344-5969)

〒530-0001 大阪市北区梅田1丁目3番1-900 大阪駅前第1ビル9階

編集代表者 関西宮沢賢治の会 深田 稔 関西岩手県人会内